渤海使入国に備え山城・近江・越前・加賀四カ国に道・橋の修理と路辺の死骸の埋葬を命じる。

また越前・能登・越中三カ国に命じて客徒供応のための物資を加賀に送らせる。

次いで能登国に対して渤海国使帰還の造船料に当てるために羽咋郡福良の大木伐採を禁ずる。

先に掲げた「対岸との交流」の図を見て頂きたい。

日本海の海流は対岸の渤海側では北から寒流に乗って、朝鮮半島の腹部を擦るように航海してくると、対馬暖流に乗る事が出来、我が日本海側に着岸できることが判る。

近くはロシヤの難破船の重油が日本海海岸に漂着して、大変困った事件を見ても判ると思う。

このようにして六世紀から九世紀末までの長い間、日本の文化を慕って、北陸の海岸に命を的にして渡海してきた渤海使に対して、当時の政府は必ずしも親切ではなかった。

大方の場合、加賀や能登の客院に留め、供応して彼らの望む大和まで案内することがなかったようだ。

しかし、この使節と我々の先祖が文化的交流をしなかった筈がないし、この熱心な命を賭しての渡海を、あの幕末に於けるアメリカからの文化の吸収のように、私達の先祖は交流し利用したに違いない。

特に彼らが土産にと加賀に置いて行った「宣明暦」という、とても進んだ暦で、江戸時代末までわが国で使われていたのを見てもわかる。

以上が遠い昔加賀海岸が主体となって交流した、現在は沿海州と呼ぶ古い国との交流の物語である。

古代の関係ある事件

三世紀後半

中の庄・加賀舞子・西任田遺跡が営まれる。

六四六年（大化二年）

大化改新の詔を発する。

六七二年（天武一年）